

幼い子の病気ほど親にとってつらいものはない。でも親子で闘病をつづけている時、その患者の兄弟姉妹もかまってもらえない寂しさやつらさと闘っていることを知ってほしい。

そんな体験の思いを込めて書いた童話が今話題になっています。

作者は兵庫県の24才の女性。7才の時に弟が脳腫瘍となり、治療中に寂しくても口に出さず「いい子」を演じたり、一方で弟中心の毎日にうんざりしたという罪悪感。そんな病気と闘う子の兄弟の心の内を4匹の熊の家族の物語で現したのです。

患者兄弟への心のケアの必要性を痛感させられる本です。

今は「塗り絵付きの手作り絵本」で病院などに広がっており、希望者には送ってくれるようです。 円の切手を同封して〒 兵庫県三田市あかしあ台 佐川奈津子さん（作者）まで。

< 第56回 ほほえみの会 >

ごく最近入院された2組のご夫婦と堀越先生ら合わせて12人が参加しました。

最近入院された方は共にまだ子どもの病気を知って数日しか経っておらずショックも大きいようです。

「病名を聞いて悲観的になってしまう」

「ドラマの世界が突然自分に降りかかるなんて」

「仕事も手につかない」

最初はみんな同じです。希望を持って一緒に頑張りましょう。

周りの人に病気のことをどこまで話していいのかわからない。という話ができました。

入院したことは話しているが病名は伝えてない。

一部の人に伝えると自分の知らないところで思わぬ方まで広がるだろう。自分の気持ちの整理もついておらず、職場でも病気を聞かれるのがつらい。

周りの家の人から聞かれたらどう答えたらいいのか。

心ない周囲の声など幾つかの体験談もできました。少し落ち着かれましたら職場の上司の方には話して理解を求めておいた方がいいのではないかと意見もありました。

また病気になったこと、その発見が遅れたこと、抗ガン剤が効かないことなどあるとつい自分を責めてしまうが、それは自分が悪いのではない。

さらに治療中は子どもが不憫に思えつい甘やかしすぎてしまうが社会生活に戻ることを考えていた方がいい。などの話ができました。

入院すると学力的にも落ちて学校に戻ったときが心配。

これに対しては入院して一人で治療に耐えることで強い気持ちも持てるし負けず嫌いにもなる。入院してプラスのこともあるのでいい方に考えた方がいいとの話もできました。

まもなく退院するが家でペットを飼っているが大丈夫だろうか。医学的には望ましくないとのことですが、うがい手洗いを徹底させて問題なかったという体験談もできました。

面会時間が延びているがその間兄弟の面倒を見てくれるボランティアがいないだろうか。

以前にも話題となりましたが改めて病院側に話したいと思います。

次回は 3月12日(日) 時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一